26-84
特14
432

穴守神社由来記

羽田土産

013799-000-8

特14-432

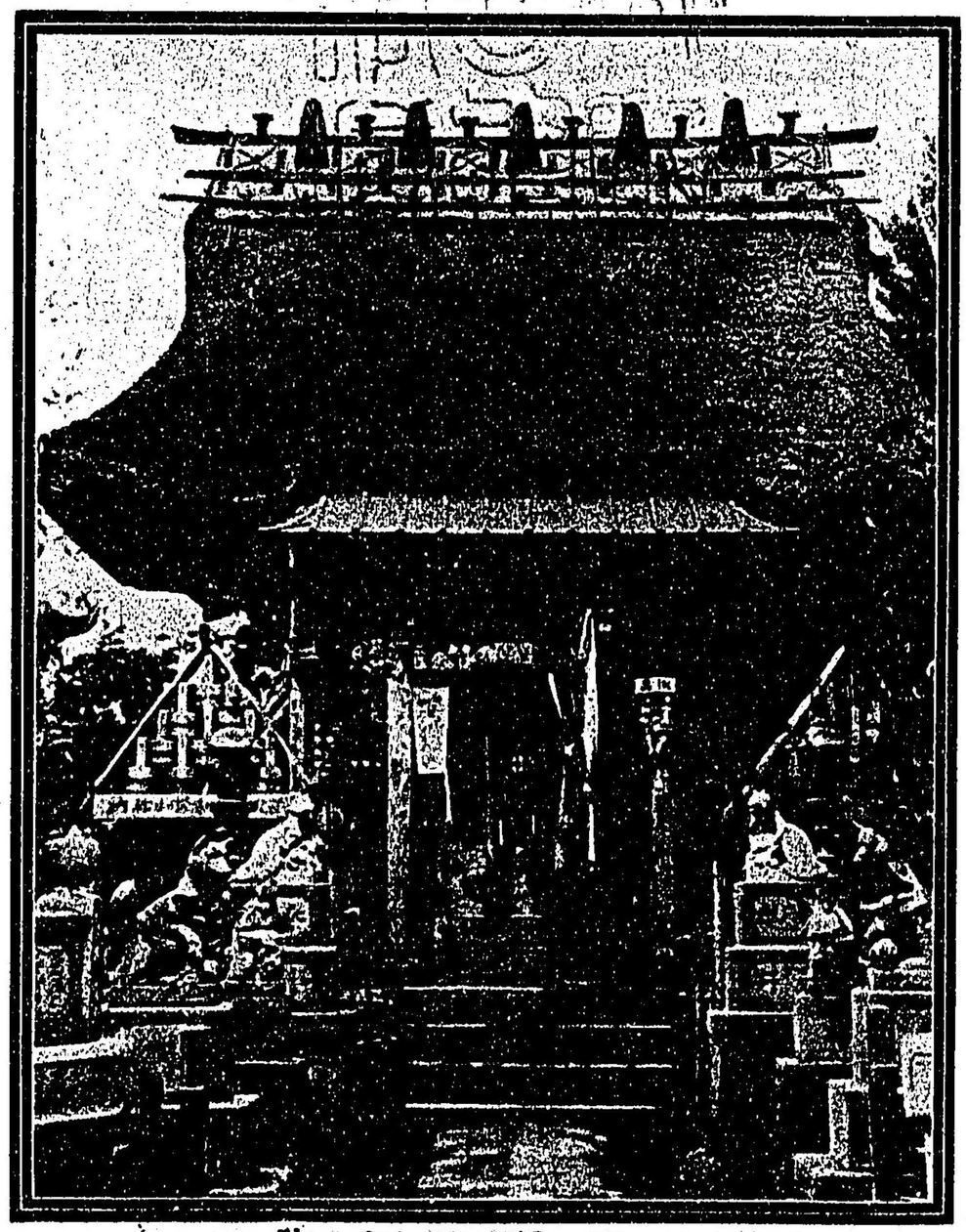
穴守神社由来記

（羽田土産）

藤井内蔵太郎／刊

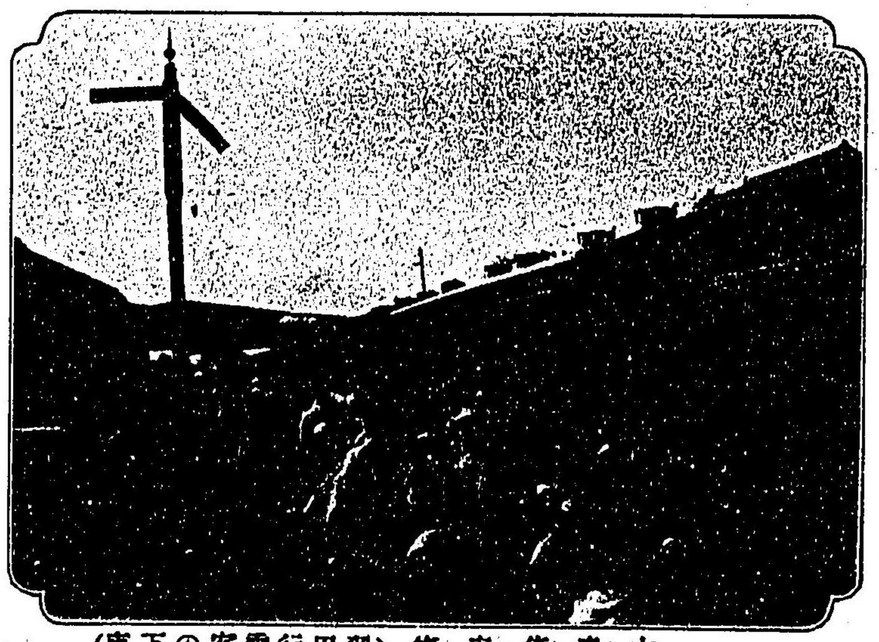
M34

ABB-0008

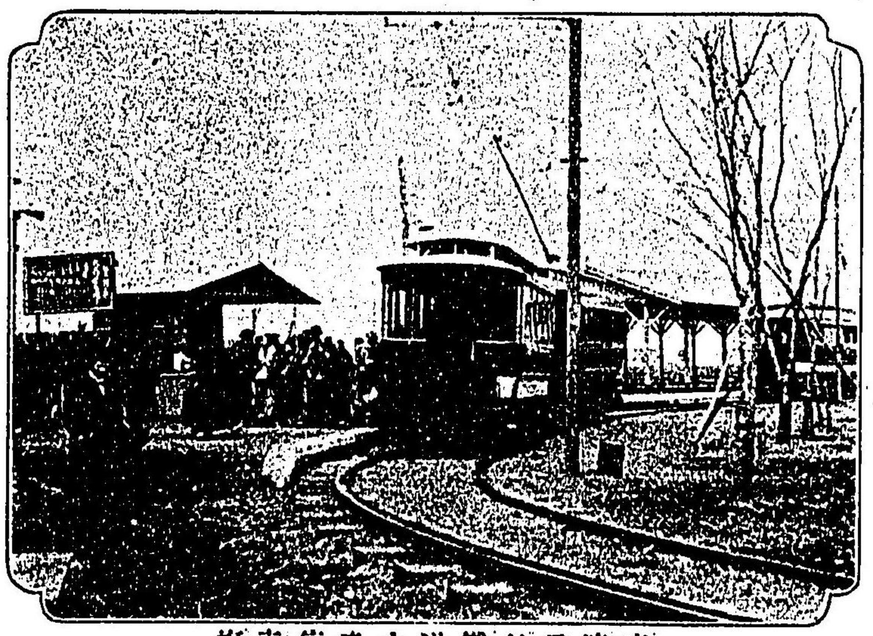


稲荷本社

大森停車場前の茶亭



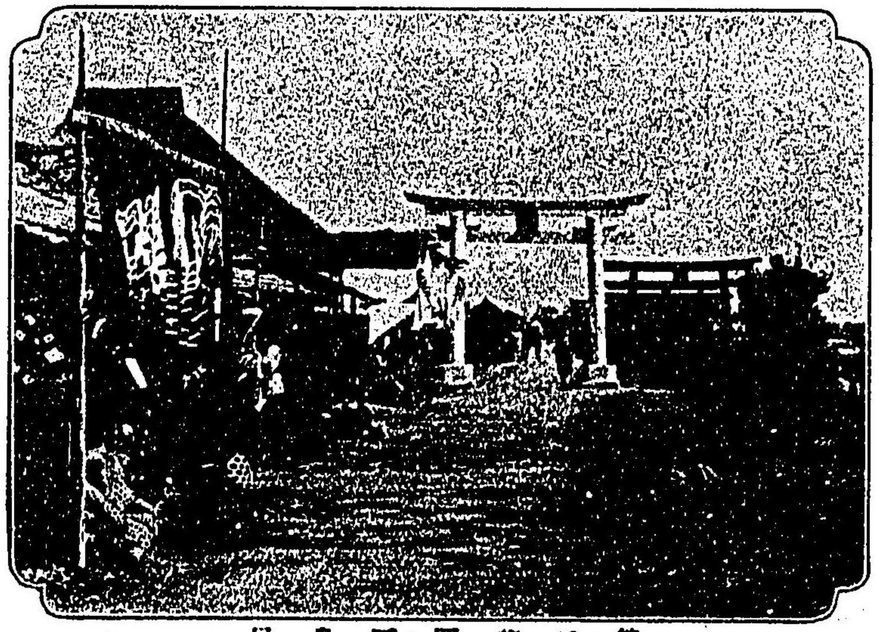
大森停車場（羽田行乗客の下車）



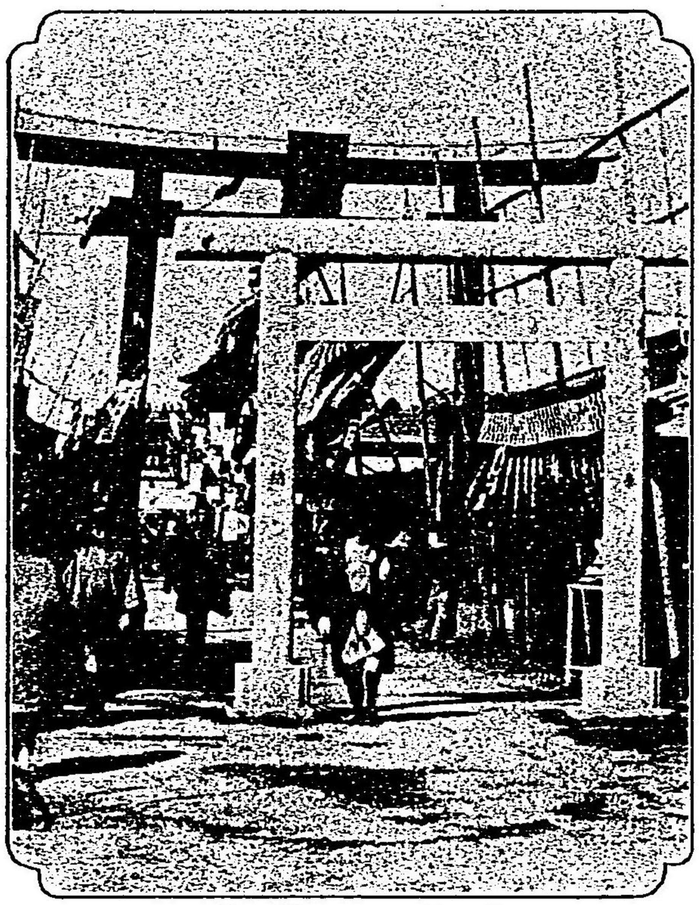
京濱電氣鐵道大森停車場

大森濱羽田行乘合船發着所（干潮の乘船）

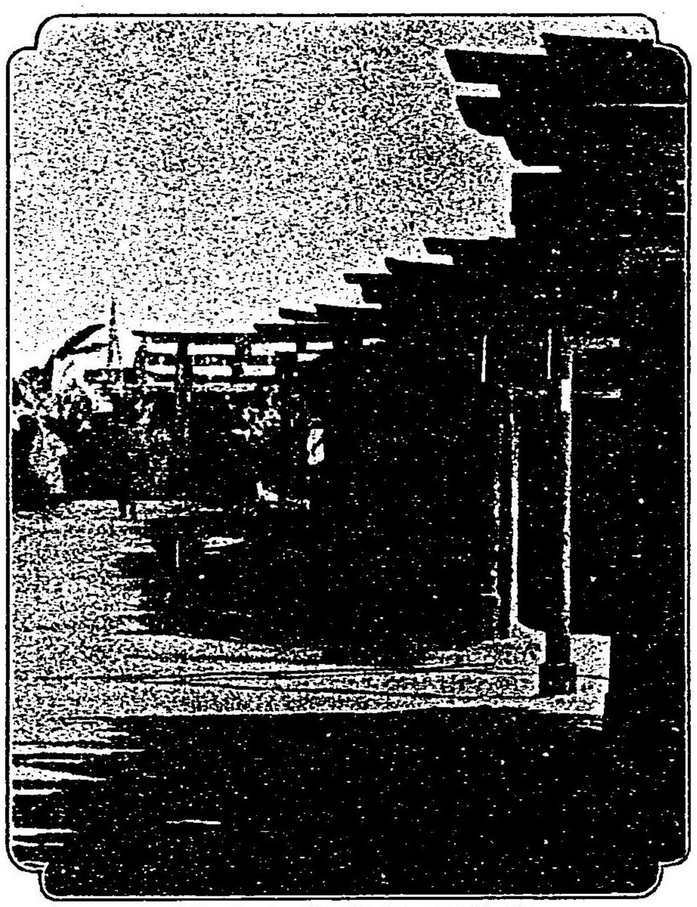
蝦取川船渡し



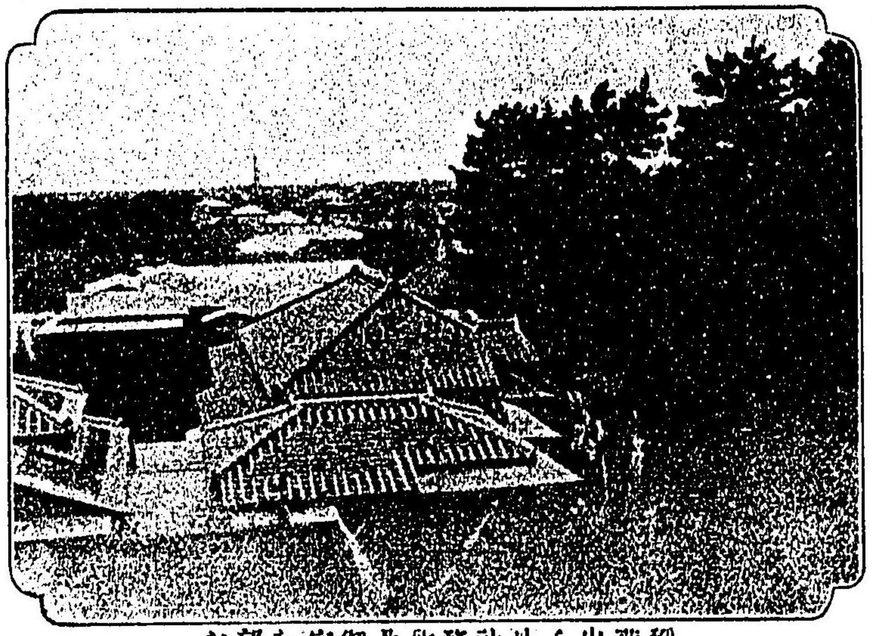
第二花岡石鳥居



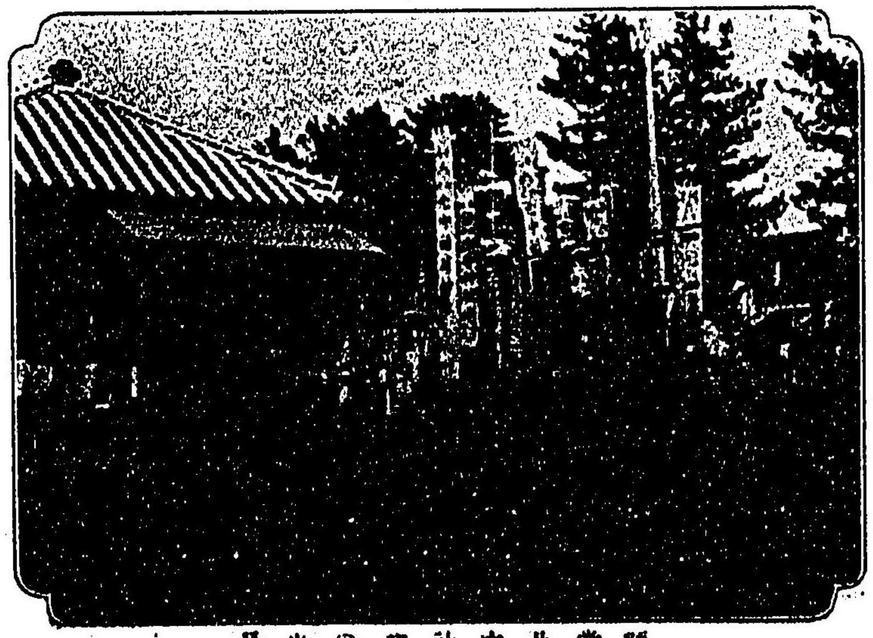
社頭の繁榮



滿願奉納華表の並列



稲荷山より社務所及御穴を望む

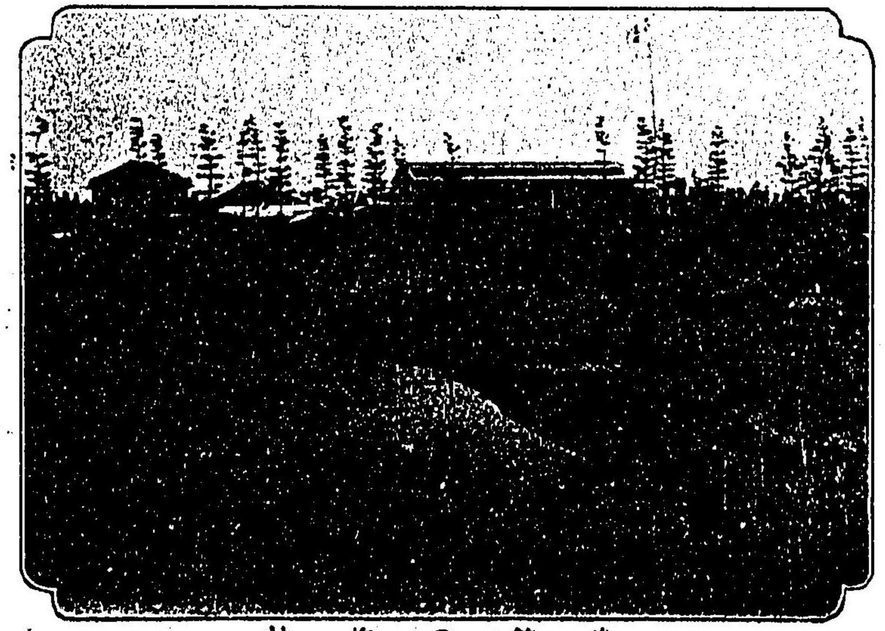


額堂及本社前の光景

（云ト山御）山　荷　稲

面　鋼　の　式　御

蝦取川の清流



林梅の館泉

東京獨興舍寫眞版

羽田宮守稲荷由來記

本社は東京府下武藏國荏原郡羽田村俚稱鈴木新田(舊名要島)の東北隅に鎭在す抑も本祠の起固を温ぬるに其昔文政年間の頃鄕族鈴木某此所に新田を開發するに當りて小かなる一祠を營み以て新田の鎭守とし稲荷の靈を奉祠せり爾來幾十年の烏兎を閲するの間地區荒寥漫り茨茅の叢生に委し人烟又稀少にして遠く一簇の漁家を見るのみ故に祠邊の如き望暮僅かに二三漁夫の來往するに止りしを明治の初年村民某なるもの漁業の歸途偶々堤頭に老狐の數兒を擁し遊ぶを見戲れに獲る所の小魚二三を投じて去る漁夫即夜夢に老狐の來るを見る曰く汝先きに投ずる所の魚少數にして數兒に分つに足らず望むらくば尙ほ數多を與へよと漁夫夢破れて之を奇異とし翌日又海濱に漁業

す獲る所前日に數倍するを以て再び數尾を穴中に投入す是より先き漁夫の妻宿痾に苦み數月の間病褥に在り加ふるに坐臥自由を欠き殆んと藥餌の施す可きなく再び起つ能はざるの悲境に遭遇せり漁夫謂らく昨夢果して正なれは寔に是れ靈狐なりと試みに祈りて以て妻の病癒を乞はんと夫より日々漁す所の魚介を供して祈願を凝らす果せる哉日幾許たらずして不起の宿痾頓みに快癒し加ふるに營む所の漁業日々夥多の収獲ありて家計も又隨つて饒かなるに至れり是に於て益信仰の念を起し日夜敬崇參拜を怠らす且已れ既に受くる所の靈驗を談示せるに依り里人耳相傳へて村郷到る所に喧傳し衆諸爭つて祈願を籠むるに又一として靈驗あらさるはなく竟に明治十八年五月に至り荒茅を開ひて一の社殿を建立し崇めて穴守稲荷神社と稱す後神職橋爪英麿呂氏を聘し神官とし廣宏なる社務所を新築せり素より利

驗の灼然たる終に京濱の兩市に普及し殊に俠斜の巷に早傳せるを以て信徒劇かに增殖し月に日に繁榮を極め都下の神祠に於てすら未だ曾て見ざる所の盛況に至れり由來本祠に祈願の信徒は方さに本願成就の徴を得れば禮賽滿願の證として一の華表を献するを例とす故に路傍に奉納せる大小華表の夥しき現數實に五千百餘の多きに上れり其隆盛最も驚く可く而して其近傍の光景に於けるも所謂長足の進歩にて二の鳥居(一の鳥居は遙かに羽田村と大森村との本道に在り)前より本祠への兩傍(約五丁)は漸次に田地菜圃を埋め數十の家屋を列築し整然恰かも一長市街の觀を現す是れ悉く賽人の休憩所及飲食店等にして他は供物神酒、土産物(目無し達磨「滿願の時目を點して納むるなり」と)住吉踊、陶製の白狐及賽珠、麥藁細工其他玩弄具等又名物としては蛤シヤコ、蟹等を鬻くの業のみにして各商共に繁榮を極む且つ近來當所

の地より鐵鑛泉の湧出せるを發見し浴場を設けて割烹及宿泊を兼ぬるもの即ち○羽田館○長流館○要館○泉館ありて建築宏壯庭園清洒なり以て遊客をして避暑温浴等の便に供せり

神穴　諸人御穴と崇む本祠の右背にありて窖上に小祠を建て周圍に屋を覆ひ中に數多の魚介及揚物を供物とす其數山積して屋裏に滿ち常に信徒の交々穴前に額きて祈誓を籠め終りに迨んで窖中の土砂を掬ひ歸るあり由來其砂土を店頭に撒布せば顧客多く商業繁榮の功德ありと是等俠斜の巷に於ける料理店、待合、絃妓、郭間其他藝人等に多し故に祭日(午の日)の如きは肩摩雜沓を極め殊に婦女子の如きは窖前に近くだも得能はざるべく又窖中時に靈狐の面を現ずことあり之れを拜視する者正しく滿願の徵なりとし欣喜雀躍他をして之を羨ましむるにあり御山社後に有り近時京濱各講の數千金を投じて築成する

ものにして高さ社頭に聳へ全山疊むに石材(黑木)を以てし各方より山頂に達するの曲徑數條ありて下には墜洞を穿ち山後に徹通せしむ山上に攀登すれば一眸の中大森、川崎、本村の各村落を望視し東北は渺乎たる海上の風光遙かに房總の翠黛を眺矚する等爽然自から心神をして快豁ならしむ

此地春時にあつては海波漣皺を寄るの汀に干潮を踏んで貝拾ひする の遊事あり海士か漁り遠浦の帆影點々手に掬す可く眸を回らせば麥隴菜圃青黃の色を交へ一島の風色宛から盆景を見るが如し夏秋に有ては最も避暑納涼に適し鑛泉に都門の俗塵を洗ひ蝦取の流れに一糸を垂れ或るは近浦に網するも興あり冬時は小春の散策に都門よりの道遠からず獵銃を負ふて汀渚に水禽を驚かすも又鴨場に鴨を網するも妙にして山上に枯野を望み盡る處白扇倒まに掛る富岳の雪景是れ

も又當所の一景物なる可し

穴守神社各講々名

本社信仰の徒にして京濱の兩市其他各地方に於ける信徒の團結世に講中と稱するもの創社以來日に月に多きを加へ今や結講しつゝある者を併せては實に一百有餘の講數に至るや必せり爰に古今現在の講名を掲げんに

○穴守元講(講の嚆矢にして木村莊平氏の發起に係る)を始め(以下イロハ順)○稲荷○一心○蠟燭○羽田稲荷○日本橋○女人○寶集○寶盛○睦愛○奉幣○寶玉○寶珠○本庄敬神○東京永續○東西○當盛○千卷○立身○御備○月參○開運○太鼓○睦○敬神○福德○福壽御神水元○五講(日本橋○青物○供物○神德○吉原講の五を稱す)○御洗米○御

膳○向運○緣組○榮久○穴守○青山午日○朝日○三社○木睦○共同○敬神○共信○友惠○有志○明榮○明德○明治○明喜○御手洗○心願○新橋御神酒○親友○親愛○信心○商盛○常燈○親祐○百明○日出○元常樂○元神泉○石橋○誠心○清光○水行○末廣講等なり

穴守神社參拜の順路(東京より)

一　新橋より汽車にて大森に下車し蒲田村より左り本社への本道一の鳥居を潛り直路蝦取川の渡船場を渉り至るを本道とす

二　同く大森の町内川橋の先き左手に穴守神社道と傍示せる曲路あり て是れを捷徑とす

三　同く大森より電氣鐵道に乘じ大森濱穴守神社行共同乘合船場の在る所に下車し(船場二ヶ所に在り)舟行するも便益なり(船賃穴守神社前蝦取川渡船場傍まで金十錢、歸り船賃金十二錢)乘船時間滿

潮なれば約一時間干潮なれば二時間餘を費す可しと雖も快晴にして海上靜かなる時は舟中の眺望頗る快豁にして又一趣の興味あり

四　同く新橋より川崎に至り電氣鐵道にて大師に詣で(大師より羽田への乘合船場ありて賃金六錢)舟にて羽田に至るも便なり又大師より羽田本村を經て蝦取川の橋を渡り羽田辨財天に詣でて本社に至るもあり其距離遠からず最も下車後の散歩に適せり

明治三十四年五月十日印刷
同年同月十六日發行

編輯兼發行人　東京市京橋區弓町三番地　藤井內藏太郎

印刷人　東京市神田區美土代町二丁目一番地　島連太郎

發行所　東京市京橋區弓町三番地　青陽堂